防災と福祉を結ぶ市民まちづくり学習としての「LODE」の提起と考察

A STUDY ON 'LODE' AS CITIZEN LEARNING METHOD FROM THE PERSPECTIVE OF DISASTER PREVENTION AND WELFARE

倉原宗孝 — * 1

キーワード：
防災、福祉、市民学習、LODE、自助

Keywords:
Disaster prevention, Welfare, Citizen learning, LODE, Self-help

Munetaka KURAHARA — * 1

In Japan today, interest in disaster prevention and welfare is increasing strongly. In this paper, it is reported for citizen participation activities that have been carried out from these disaster prevention and welfare point of view "LODE". The "LODE", L (little people), O (old people), D (disabled people), such as from the point of view of the socially vulnerable, it is to experience thought everyone in the E (evacuation). Through the eight cases in this paper, reporting and of the contents of the workshop, actual conditions of local communities, increased awareness and concerns of participants, personal information, it is considered such.

1. 背景と目的

災害・防災への関心と対応が近年全国的に高まっている。先の東日本大震災をはじめ近年の大災害がもたらしたインパクトは大きい。そこには近く想定される南海トラフ地震などへの視野もある。防災は今、全国の大きな課題である。一方でわが国の今日的課題も多々ある。特に高齢化・高齢社会への対応は大きな課題である。子ども達の保育・教育・住環境あるいは子育て環境も課題となっている。また障がい者の環境についても同様である。いわゆる弱者の視点からの社会的構造の再構築がいま強く問われている。こうした福祉分野からの現代社会への問いかけは大きい。「防災」と「福祉」、ある意味で非日常と日常の課題がわが国には同時進行的に表層化している。

本稿では、こうした防災と福祉を結ぶ視野から住環境やコミュニティの改善・育成に向けて取り組んだ後に示すLODEという手法、活動について報告し、そこから今後の防災・福祉まちづくりに向けた意義や課題、また取り扱った手法について考察する。

本稿で掲げるような防災と福祉を結ぶ活動は近年いくつか見られるようになってきた。例えば神戸市では、1985年から「自主防災推進事業」で防災に関する知識普及・意識啓発を行ってきたが、阪神淡路大震災において十分機能しなかった反省の上に、日常の地域福祉等の活動を通じて育まれた絆を災害発生等の非日常に活用できる組織として「防災福祉コミュニティ」づくりに1995年度から取り組んでいる¹⁾。こうした防災と福祉を結ぶ視野と活動について倉田和四生が『防災福祉コミュニティ』²⁾を著しており多くの示唆がある。同時にここで注視しておきたいのは倉田は早くから防災コミュニティと福祉コミュニティの接合にコミュニティ形成の展望を見ているが、その先見は大震災という経験の上でしか結実しなかったという指摘³⁾もあることだ。この指摘は15年ほど前のものだが現在でも同様に言える。すなわち防災と福祉を結ぶ活動は今後の日常・非日常の地域づくりにおいて有効であるが、その活動経験の蓄積は未だ浅く、また理論的・技術的な研究は始まったばかりと言えよう。本稿はそう

した上で、各主体と協働した自らの一連の実践活動の中での経験と観察、関係者・住民・参加者へのヒヤリング等からの報告である^{注1)}。

2. 防災・福祉の参加型学習手法としてのLODE

防災・災害に関する活動は近年各地で行われているが、その中で例えば市民参加型手法としては、地図上での災害訓練ゲームDIG (Disaster Imagination Game)、災害時に混乱する避難所の運営を訓練するHUG (Hinanzyo Unei Game)等によく知られ一定の普及を見せている⁴⁾。

筆者らは上記DIGの考案者の一人である南部美智代氏（災害ボランティアネットワーク鈴鹿）と共に各地で防災をはじめ地区のコミュニティ形成や住環境整備に向けた市民参加による各種活動やワークショップを経験してきた。その中でまちづくりに対する市民の関心や参加意欲、意識・認識を触発する上で防災は有効・重要なテーマであることを実感してきた。一方でDIGには福祉の視点が弱いこと、また現代社会における福祉の視点の必要性・重要性を感じていた。その上で「災害福祉DIG」のテーマで地域のワークショップを経験する中で、災害というテーマのもとに高齢者も含めた「弱者の視点」が当事者と共に幅広い住民層や地域環境形成において重要・有効だと感じてきた。その中で考案したのが本稿で取り扱うLODEである^{注2)}。LODEとは、子ども(Little People)、高齢者(Old People)、障がい者(Disabled People's)の視点からの災害回避(Evacuation)である。加えてここには、新しいコミュニティ形成など地域社会の動脈(lode)を探ることが意図されている。

上記経緯からLODEに先行してDIGがあるが、その違いを記しておく必要があろう。DIGが主に住宅地図上で展開される平面対応であるのに対して、LODEでは平面地図と共に、特に都市部に多い中高層集合住宅にも対応するように立面上でも検討作業を行う（ここには地域・生活の諸要素は本来二次元＝平面で把握し得るものではなく三次元・四次元の考察の必要性を意識している）。またD

¹⁾ 岩手県立大学総合政策学部 教授・学博
(〒020-0693 岩手県滝沢市菓子 152-52)

¹⁾ Prof., Faculty of Policy Studies, Iwate Prefectural Univ., Dr. Science

I Gが防衛関係者や防災関係者から提案・普及された経緯から「要援護者」に関する配慮・知識普及が小さいのに対してLODEではそうした弱者の視点を重視している。加えてLODEでは災害時だけではなく平時の見守りなどにも活かすことが出来るワークショップが意識されている。

LODEの基本内容は主に地図上での災害思考訓練であり、特殊な道具等を使うものではない。主にグループ毎の作業となる。まず対象地や団地・マンションとなる図面上に、実際のあるいは仮想の状況を凡例シールを利用して標記していく。その中で主に高齢者（前期・後期）、子ども、赤ちゃん、妊婦さん、障がい者、一人暮らしの高齢者、歩行の際に杖の必要な人、等の確認を行う。ここでは元気な高齢者の存在にも注目する。また犬や猫などペット・小動物にも着目する。この作業の中で参加者は住環境・近隣住民に対する再認識・確認や弱者の存在に目を向けていく。また避難場所やそれらの標記などについて確認していく。その後、仮想の災害を想定し、避難経路や避難方法などを思考訓練する。

こうした図上訓練と並行して、災害・防災で役立つグッズ作り（貴重品を入れておく小物入れ、新聞紙のスリッパ、簡易コンロ、等）を通じて災害という非常時の対応と平時からの習慣化を学んでいく。

またLODEの特徴の一つには、現在の状況と共に、近未来を想像した思考訓練がある。これまでの経験から「5年後」が有効に感じる。5年後の身体状況、家族・近隣構成などを想定することは参加者のリアリティも高めその中で防災や福祉のことを考えて行く。

図1 LODEで利用する作業図

ところで本稿で扱うLODEにおいて、その理念的な意味と手法・技術としての両面が含意される。LODEの理念として、防災と福祉を結び視点から、特に弱者の視点からのコミュニティ形成、まちづくりが標榜される。本稿では、こうした理念のもとに実践していくLODEの手法・技術の面を主に取り上げる。言い換えると、理念としてのLODEと、その実践内容としてのLODEワークショップ（前後の一連の作業含む）と位置づけることもでき、本稿では主に後者の内容を取り扱う。前者の理念については別途まとめた。

3. LODEワークショップのコンテンツ

まず、これまでLODEワークショップ（以下WS）で取り扱ってきた内容（コンテンツ）をまとめておく（表1, No. 1～21）。大きくは、①思いや情報の提供（No. 1～5）、②図上作業（No. 6～10）、③

創作活動（No. 11～13）、④ほか各種メニュー（No. 14～21）、である。各実施地区において、目的、対象地区の状況、参加者の属性・興味、等に合わせてこれらのコンテンツを組み合わせたプログラムでWSを実施した。建築・都市計画分野においてはこうしたWS技術・コンテンツは相当に蓄積されているが、LODEのWSとして特徴となる点について幾つか記しておきたい。

一つは参加者の＜感動＞や＜共感＞を如何に生むかが重要である。勿論、他の多くのWSでも感動・共感体験は重要だが、特に防災や福祉の分野ではその要素は大きいように思う。ここには体験談などの話に対するものとグッズ・作業内容の工夫・アイディアに対するものがある。主催者・関係者の体験を通じた自分の言葉による話（表1, No. 1）、各防災グッズや紙芝居などが創作された背景（No. 11, 12, 13, 14）等、また日用品の意外な活用方法（No. 5, 12, 13）等、あるいはオリジナル防災グッズ（No. 15）の弱者への思いのこもったアイディア（例えば、乳幼児に使っていた頃の匂いが残っている布で作った頭巾が、自閉症など障がいのある人にも心理的安定を持たせるのではないかと）に対して、参加者からのコメント、WS後の感想などに感動・共感したといった声が多い。こうした感動・共感を触発しながらWS時の経験と共に弱者の視点から防災・福祉を見つめるLODEの理念が参加者に伝わっていると思われる。勿論、こうした感動・共感を生み出すことは技術的問題を超えた難しい内容で、筆者らも十分な成果を生み出せない中で試行錯誤しながら行っている。しかし少なくとも参加者に＜感動＞＜共感＞をもってもらう事を意識することは重要・有効である。

二つに、LODEにおいて、災害時という非常時を想定したWSが行われるが、平常時の意識・認識をしっかり持つことが強く意図されている^{注3)}。例えば、誰もが普段見慣れているはずの防災に関するサイン（No. 3）を正確に記せる参加者は毎回ほとんどいない。こうした参加者の認識の実際をあらためて感じてもらう事で、平時の防災意識が促進される。またWSの場を和ませる為に緩やかな作業・行動も必要だが、LODEの場合、災害時を意識してWS時の厳格な行動や対応を求める場面も多い（作業時の移動やNo. 18 機器取扱、等）。

三つに、災害時には弱者の存在が顕在化する場面が多いが、ここでは福祉分野にも参加者の意識・認識を向かわせる。同時に、WSの場面によっては福祉（弱者）をテーマにした作業を通じることで災害時の対応をより実感して学習していくことになる（No. 6, 7, 8, 20）。

いずれにしてもLODEのWSにおいては実施主体においても参加者においても＜水平目線＞であることが、企画、WS運営、WS前後の調整など一連の活動において意識される。その意味でLODEでは、取り扱う主なテーマ・対象が弱者（L.O.D）であると同時に、その姿勢において弱者の視点（平等、水平）が重視される。子どもにも高齢者にも分かりやすい言葉で語りかける（No. 1, 2）、あるいは生活者としての言葉、方言なども自由に使う等はその一つである。その点では、即興で参加者にWS運営者や専門家の立場になってもらう等の場面も多い。また「自分の言葉で自分自身の思いを伝える」ことも意識される。感動、悲しみ等を自分の言葉で伝える、伝聞形ではなく「自分はこう思う」といった素直は発言の場面に参加者に求められる。これらの点が翻ると先に記した＜感動＞や＜共感＞を生むことにも寄与しているようだ。

4. LODE実践の概要と考察

以上のような内容で2年ほど前からLODEの提起と共に各地でWS等の実践を経験しているが、ここではこれらの経験のもとに平成26年度に行った8事例を主な対象として報告する。

図2に8事例の概要をまとめる（NO.1～NO.8）。防災・福祉という点から、取り扱った要援護者のタイプでみると、「子ども（L）」をテ

ーマにしたもの（NO.2,3,5,8）、「高齢者（O）」を対象としたもの（NO.1,4,6,7）となる。なおLODEで掲げるもう一つの「障がい者（D）」についてはWSとしての取り扱い方が難しく現在、当事者・家族・関係者へのヒヤリング・実態調査等を通じて検討しているところである。また地区特性からみると「一般住宅地」が対象となったもの（NO.1,2,3,4,5,7,8）、「マンション等」を対象としたもの（NO.1,6）が

表1 8地区のワークショップで取り組まれた各コンテンツ

NO	タイプ	コンテンツ名	内容・ねらい	効果、特徴、要点、等
1	想いや情報の提供	体験談	WSの導入として、また作業の随所で、主に進行役から体験談を通じて作業の意義を伝える。	・自分の言葉で自分の思いを伝えることが参加者の興味・共感を生む上で有効。 ・例えば、グッズ(三種の神器)説明において被災地での支援経験から生まれたこと等、WSで取り扱われる内容の理解を生む。
2		問いかけ(自助、大切なもの)	あなたにとって「自助とはなんですか」「大切なものはなんですか」の問いかけ。回答を集めて紹介、評価等。	・防災を主題にしたWSだが、普段意識しないコトや存在にも目が向けられている。 ・子供達の回答にユニークかつ重要な示唆も多かった(「私は次女(ジジョ)だけと一緒に参加した長女も大事にして」「逃げる時枕が大事、でも本当は家族が一番大事」等)
3		避難所、看板の印	避難所の標識などを参加者に思い出して描いてもらう。	・普段目にしていないはずの標識(ex. 避難場所)も多くが正確に描けない。 ・こうした簡単なこと、日常のことから、しっかりとやることが重要とWSの意義を伝える。
4		災害伝言ダイヤル	災害伝言ダイヤル「171」の使い方など	・意外と多くの参加者が知らない、試したことが無い人が多い。 ・171に続く「自宅の電話番号(緊急時に連絡すべき人の電話番号)」を知らない子供達が非常に多いことが分かった。防災の基本の一つとして重要課題である。
5		役立つグッズ(保冷剤等)、手話、等	災害時・緊急時に役立つ身のまわりの物や使い方を紹介。	・災害時だけでなく日常でも役立つような情報として参加者の興味もあり、有効な情報提供となっている。
6	図上	自分や近隣住民の図上記入	作業、訓練の舞台となる図上に自身の住まいを位置づける。また他の参加者や近隣住民も記していく。	・地図を使った導入作業として主に行う。自宅を記すことで参加意欲も高まるようだ。 ・自分の住所が言えない子供が多い。ただし図上で場所は分かるので、そのもとに大人のアドバイスなどで住所を知る機会にもなっている。
7		弱者(高齢者、障がい者、子ども)の存在記入	主に地図上で凡例シールを使いながら、高齢者、障がい者、妊婦さんなど弱者の存在を確認していく。	・身近な人々の存在を再認識すると共に、そうした存在への配慮の必要性を自覚。 ・普段交わる人はある程度知るが(ex. 回覧板の範囲、同じフロアー、等)、それ以外は知らない事が自覚される。作業グループを交代して情報を埋めることも有効。
8		災害施設・住環境要素の記入	災害時に知っておくべき各設備・場所を主に地図上で確認。	・弱者の存在確認と共に主作業の一つで参加者間で盛り上がる。 ・一定の時間経過後に、弱者の存在と同様にグループ毎に情報の比較や、またグループを交代して情報を埋めていくと効果的。
9		図上での避難	仮定の災害を想定し、図上で避難訓練を行う。防災力・避難力を高めると共に、弱者の存在へも認識を高める。	・各自が避難経路を確認することで図上での避難訓練になっている。同時に防災施設や日常の住環境に目を向ける動機付けになっている。 ・避難の際に多くが弱者を意識していない。その指摘により改めて弱者への認識向上。
10		災害時仮想質問	避難時の戸締り・メモ、避難所での対応・協力、物資配給、ペット問題、等の仮想質問を皆で考える。	・災害・防災に関する各種情報は参加者にとって有効な面があるが、唯一の回答は無いことが多い。皆で考え合う、作業を通じて発言や行動を共にする効果がある。
11	創作活動	小物入れ作り	災害時に必要な物を改めて考え日頃から意識しておく事を伝える。それらを入れておく小物入れの創作。	・高齢者の参加者も多い中で、東日本大震災での経験から「入れ歯・補聴器・めがね」が重要なものの指摘に参加者は共感している。また大切な物を再確認する機会に。 ・創作活動は皆楽しく取り組む。子供達は想像以上に作業が早い。
12		新聞スリッパ	災害時に足下が危険になることを認識。身近な新聞紙で足の保護となるスリッパを作成する。	・身近な新聞紙がスリッパになり、簡単に作れることを参加者の多くが楽しんでいる。 ・時間によってはあえて片方だけ作り、もう片方は「お家で作って家の人にも教えてあげて」等の伝達が家庭・大人への普及としても効果的。
13		ほのぼののあかり	災害時に役立つ身近なサラダオイルで簡易ランプを作る。その利用法の説明など。	・非常時に役立つ情報として効果的。ティッシュ(火の芯)やアルミホイル(支え)等、身近な物を使った創作に参加者は楽しく関わる。 ・時間・空間制約から実際は火をつけないことも多いが非常時の知識として有効。
14	その他各メニュー	紙芝居による防災・活動紹介	紙芝居により災害の教訓と共に地域や生活への認識・意識を高め伝える。	・実際にあった災害とその教訓を手作りの紙芝居にして参加者に聞かせる。「郷土物語」など集落に残る実話と行事などを紙芝居として表現している。 ・ワークショップの最後に教訓としてお話しするなど効果的。
15		防災グッズ	オリジナルの防災ずきん等を紹介し、防災と共に、弱者への存在、そこへの配慮も促す。	・例えば乳幼児に使用していた布を使った防災ずきん(小さい頃のおいが残っている事で特に障がい者への精神的安定が期待される)等を紹介する中で、防災・福祉の認識が深まると共に本LODEの主旨への理解・共感が深まっていた。
16		一言感想	参加者から一言感想をもらう。ポストイットにメモを書き紹介、活用する等もある。	・参加者の自己表現、参加意識を高める等の効果がある。LODE・WSの場合、参加者に他者の前で直接口頭で話してもらう事が本人の自覚とより良いWSの場作りに貢献しているようだ。
17		食の共有	皆で一緒に食事をする、物を食べることは気分や場の雰囲気や大いに和やかにしてくれる。	・防災食と美味しい物と二つの内容がある。食べ物の意味を一言説明する等も効果がある。LODEの場合、南部氏が在住する三重県に縁のお餅やぜんざいなど出すことが多く、材料を提供してくれた企業などを紹介すると参加者の興味もより高まっていた。
18		トランシーバー活用	トランシーバーを使って災害時の情報のやりとりを経験する。	・トランシーバーの使い方を学ぶ事もだが、特に子供達にとって、説明をちゃんと聞く、ルールを守る、順番に回すなど他者への配慮を経験する上で効果がある。 ・野外活動等、住環境への観察を促すよい動機ともなっている。
19		記念撮影	作業を共にしたグループで、また全体で記念写真を撮る。	・写真撮影、記憶に残すといった楽しさと共に、後日連絡事項などを伝える機会にするなどにも有効。WSの場を和ます。
20		手話の紹介・体験	多様な弱者の存在、関わり方を知る。	・詳しい専門的な事を学ぶというよりも、様々な状態の人たち、またそこに関わる人達への認識を促す上で有効。 ・参加者が弱者の立場を直接体験することは非常に新鮮な経験のようだ。
21		屋外の観察・調査	屋外の住環境を実際に観察・体験する。	・野外体験は参加者にとっても有効。長時間のプログラムにおいては、良い刺激に。 ・基本は防災・福祉といったテーマで住環境を観察するが、防犯や景観、歴史など様々な環境要素に話題は広がる。

ある(No.1 は双方が含まれた)。LODEの特徴の一つである立体的な居住形態を取り扱ったもの(立面図)が後者のマンション等である。

いずれのプログラムも約2時間ほどで、主な内容は先に記した図面や凡例を活用した住環境・コミュニティの再認識、避難や支援の思考訓練である。地区によっては、お餅やお菓子を一緒に食べる等、各地の状況に応じたプログラムで実施された。

これらのWS及び企画・運営に伴う前後の取り組みなどの経験から、以下「防災と福祉を結ぶ」という点に関心を寄せながら考察する。

(1) 防災と福祉が活かし合うWSコンテンツ

前章でWSの各コンテンツを記したが、それらは防災と福祉の双方の視点から取り扱われていることで内容が拡充している。特に「図上作業」(表1、No.6~10)や「防災グッズ」(同、No.15)等にその様子が現れていた。図上作業においては、災害時に弱者へ配慮することは当然重要だし、同時に平時での弱者への配慮、また自分自身が数年後は弱者となる可能性も大きいこと等を参加者が意識する経験が積まれている。防災グッズにおいても、例えば「防災ずきん」は乳幼児に使っていた布を使って作成する(そのことで障がい者への精神的安定が期待される)等、防災と福祉を結ぶ物となっている。これらには特に、弱者に対する、また弱者の視点からの防災と福祉への認識強化とそれを踏まえた生活環境整備への示唆がある。弱者の視点は今日一般的に広く唱えられるが、防災・福祉という分野からの問いかけが、そのことを鮮明にしていた。

(2) 地域コミュニティの実態認識と育成動機

地域コミュニティの重要性については論を待たないが、ともすると曖昧な地域コミュニティの実態をあぶり出す効果が防災や福祉の視点にはある。防災、福祉というフィルターを通すことで参加者は当該地区のコミュニティの実態をリアリティを持って実感していた。WS時、またその後の会話、アンケートなどから、多くが当該地区の脆弱なコミュニティ状況を再認識している(住居外の住棟の様子は全く知らない、回覧板が回る範囲以外のことは知らない、等が改めて参加者に自覚・共有されている)。防災や福祉は地域コミュニティの健全度合いをチェックする指標としても有効と考えられる。こうした実態認識が、LODEや連動する活動に対する主体性を参加者に高めている(「今後も続けていきたい」「こうした情報を蓄積していくことが大事だ」等の声が多く事例で聞かれた)。

一連の作業を通じて現代社会におけるコミュニティの脆弱性があらためて実感されたわけだが、その状況の中で次のようなコミュニティの種別が把握された。ア)町内会・自治会(主に中高年層で要支援・要介護ではない方々)のコミュニティ、イ)PTA・小中学校区(子供を持つ親のコミュニティ、子どもたちの学校コミュニティ)、さらに上記ア)イ)から漏れやすい方々で、ウ)介護保険を利用している高齢者、エ)障がい者およびその家族、オ)自宅は寝るだけの場所だという父親たち(生産世代)である。かつてはこうしたア)~オ)が交流・触れ合える場が地域にはあったが、現代ではそうした場や機会もないことがあぶり出されている^{注4)}。

その中で、子どもや女性の視点は地域情報を豊富に持っていることも伺えた。各グループの作業を比較しても女性が多いテーブルの情報は他グループより情報量が明らかに多い(ある程度予想されることだが、WSでテーブルを交換して他グループの成果を見る場面などでも参加者が実感していた)。同様に、子ども達の情報にも独自

の内容・量が見られた。例えば、子どもが居る住宅など大人達では十分把握できないことが多かったが、仮に一人の子どもだけでも多くの情報を指摘してくれたこと、ペットを飼っている家の状況や地区に生息する小動物の存在、等。さらにWSでの経験を家族・地域に伝える等、伝搬者・普及者としての子ども達の力を改めて感じた。LODEとしても今後の有効な視点として検討していきたい。

(3) 既存住環境・生活環境への再認識

WSや一連の活動を通じて、コミュニティの現状、様々な弱者の存在への再認識に関わるものに促された。同時に、これらを動機としながら住環境・生活環境の様々な要素への視野が参加者に広がっていた。このことは各種まちづくり活動においていえることだが、今回のLODE実践においても顕著にみられた。例えば、防災の点から防犯、空き家の実態認識などである。あるいは当該地区の歴史、観光や産業などへも視野が広がっていった。

今回とりあげている事例では時間の制約上、主に屋内を主としたWS(図上訓練等)を行っているが、これらが屋外(地域の現場)での作業と連動することが効果を発揮する。消火栓や防火水槽など防災面から、一人暮らし高齢者の実態把握など福祉面から、また通路幅や移動距離、AED装置の設置場所など、住環境を点検・改善する上で防災・福祉は子どもから大人・高齢者まで各参加者の能動性を触発するテーマとなっている。こうした図上での全体把握と現場の細部情報や実体験が相互作用的に効果を発揮する。

(4) 有効な人材・既存組織の発掘・育成

まちづくり・市民活動において人材確保・育成は重要課題であるが、防災・福祉分野を主題にしたLODEの中で効果を発揮している。ここでは、社会福祉協議会のメンバー、またそうした社会福祉と結び合う地域住民・関係者の人的能力が顕在化・育成されている面が大きい。特に今回取り上げている事例の幾つかでは(No.1、6、8)社協メンバーの活躍が重要であったが、もともと福祉分野をフィールドに内在されていたモチベーションや資質の高さに対して、防災というテーマが新たな福祉活動展開の回路として見出されているようだ。ここには福祉という平時の課題や日頃の活動に対して、災害という非常時の課題が安全安心な地域社会を育成することへ住民・関係者の意識・認識を触発している面がある^{注5)}。

このことは人材という点と共に、既存組織・団体の有効活用・再生という点でも言える。経済性・効率性等が強く問われる現代において、重要であるがその存在意義が問われる団体・活動は多くある。社会福祉協議会もその一つであろう^{注6)}。同様に今回の報告事例では少ないが、防災分野の活動においても福祉の視点から新たな活動展開の回路を示唆するものもあった(地域の防災活動において、高齢者・要支援者の存在をテーマにする中で、活動の充実と共に活動仲間の輪が広がっていく等)。同様な既存団体・活動が各分野・各地区に多様にあると想像されるが、そうした既存団体・活動の新たな活動の回路を開く上で防災また福祉は有効なフィールドになると思われる。地区のハード・ソフトの総合的な暮らし・まちづくりを睨むうえで、防災と福祉は、日常と非日常を効果的に融合させながら地域・関係者を触発し課題を紐解く上で有効な視点を提供し得ると思われる。

(5) 個人情報の有効な取り扱い

防災面においても福祉面においても個人情報の取り扱い方が今日非常に難しく課題になっている。これは他分野でも問われることで

<p>NO. 1 実施団体:伊丹市摂陽地区住民団体 実施日:2014.10.7 会場:伊丹市堀池(人権啓発センター)</p> <p>地区特性:幹線道路に囲まれて住宅地が密集する。マンションなども点在。主に第一種中高層及び第二種中高層住居専用地域、等。</p> <p>参加者数:45人 所要時間:165分</p> <p>【背景・動機】マンション・近隣住民コミュニティを課題とする住民有志の取り組みで防災へも関心が。地元社協担当者より筆者らに地域福祉活動の世話役住民層を対象としたLODEワークショップの依頼があり実施。</p> <p>【主なWS内容】地区地図を使って自宅、避難所、公衆電話等の住環境や要援護者等の存在を確認。その後「仮想マンションの立面図」(写真下)を使い防災訓練。そのほか「自助」や「グズ」(高齢者三種の神器)の紹介など。</p> <p>【備考】社協担当者と地元住民のこれまでの信頼関係が有効な基盤として作用。地域福祉活動の世話役が主な参加者だった為積極的に臨機応変な作業だった。WS後も住民関係者と意見交換が行われ今後の協力依頼・相談。</p>	<p>NO. 2 実施団体:三重市立長太小学校 実施日:2014.10.23 会場:三重市立長太小学校</p> <p>地区特性:伊勢湾に隣接する住宅地。周りには田畑も広がる。第一種住居地域、第二種中高層住居専用地域、準工業地域、等。</p> <p>参加者数:46人(小学校4年生) 所要時間:90分</p> <p>【背景・動機】特に三重県内で防災ボランティアとして知られる南部氏に小学校側から4年生(2学級)対象の特別講座の依頼がある。授業の一環として子どもたちに防災をテーマにして実施される。</p> <p>【主なWS内容】講師の話と共にゲスト(市役所3名)の紹介、スローハウスワークショップ(スローを使った建築構造体験等)、グッズ紹介、家族に今日のことを報告するよう宿題等。</p> <p>【備考】子供達にとって市役所や他都市からの参加者の存在・発言が刺激になっていた。子供達が示した大事なものは「食料、水、お金などより」「家族」であったことは示唆的だ。事後、子供達から感想・感謝文が寄せられたが63%(29/46名)の子供が「帰宅して家族に学んだ事を教えた」と記しており、LODE効果の示唆の一つとも言える。</p>
<p>NO. 3 実施団体:知多小学校教員研修会 実施日:2014.11.20 会場:桑名市役所(教育委員会会議室)</p> <p>地区特性:各地区からの参加者のため鈴鹿市(伊勢湾に隣接し住商混在)を仮のモデルとして設定し取り組む。</p> <p>参加者数:15人 所要時間:90分</p> <p>【背景・動機】過去に南部氏の防災講座に参加した経験のある教員から教員研修の一環として依頼がある。</p> <p>【主なWS内容】班毎に「自助」「避難所のマーク」「避難所であなたができることは」等の思考。各参加者の住所が異なるため別地区(鈴鹿市)の住民になったと仮定して図上訓練。津波を想定した図上避難シミュレーションも行う。</p> <p>【備考】公立学校教員の防災に対する意識の低さが感じられた。他の参加者(教員)の回答をまねるなど自信を持った対応が少なかった。学校における関係者(教員等)の防災意識・認識を高めることは課題かも知れない。</p>	<p>NO. 4 実施団体:宮崎連合町内会 実施日:2015.1.12 会場:伊勢市岡本町(宮崎連合会館)</p> <p>地区特性:歴史また観光として著名な伊勢神宮(外宮)に隣接し住居系の地域が広がる。</p> <p>参加者数:35人 所要時間:100分</p> <p>【背景・動機】古くからの市街地が広がり観光地でもある当該地区において防災への関心も近年高まっており防災講座の一環として南部氏に依頼、実施される。</p> <p>【主なWS内容】「自助」等の質問、「グズ」(高齢者三種の神器)紹介、伊勢湾台風等の話。図上で自宅、避難所、弱者の存在等の確認、仮想災害にもとづく避難ルート検討を行う。当該地区に関する過去の災害記録の話に触れる。</p> <p>【備考】図上作業では「空き家が多い。夜電気がついてなくて分かる。」等の地区問題も認識される。多くの参加者が高齢者だったが外宮に隣接する歴史性から過去の歴史的災害にも認識が高く、皆が能動的に作業に取り組む。</p>
<p>NO. 5 実施団体:特定非営利活動法人・暮らしづくりネットワーク北芝 実施日:2015.2.7 会場:箕面市萱野(らいとびあ21)</p> <p>地区特性:一種、二種中高層住居専用等の住居系、商業系による既成市街地。阪神淡路大震災の経験があるため防火水槽などへの認識も比較的高い。</p> <p>参加者数:20人(子ども15人、大人5人) 所要時間:180分</p> <p>【背景・動機】実施地区にある施設を指定管理するNPOが子どもたちの教育の中で防災に関心を持つ。その上で子ども対象の防災講座を開催したい旨依頼があり実施。</p> <p>【主なWS内容】緊急時に役立つ小物入れ作成。災害時の火の利活用説明。図上WS(自宅、避難所、危険な場所、避難ルート、等の確認)。屋外に出て防災設備の確認。新聞による簡易スリッパ作り。防災紙芝居の実演。ほか。</p> <p>【備考】長時間の創作活動等も子供達は積極的に参加。室内のみでなく屋外の活動も(写真下)有効だった。一番大切なのは質問に「家族」と答える子も。避難ルート確認では防災のみでなく防犯面へも認識が広がっていた。</p>	<p>NO. 6 実施団体:サンイ丹駅前ハイツ自治会 実施日:2015.2.22 会場:伊丹市有岡(サンイ丹集会所)</p> <p>地区特性:JR伊丹駅に隣接するマンション群の一つ。近隣にはイオンモールなど各商業施設も多い。工業地域。</p> <p>参加者数:25人 所要時間:150分</p> <p>【背景・動機】近隣地域で別途行ったLODEに参加した当該地区マンションの自治会長が関心を持ち実施の依頼がある。当該地区担当の社協職員と連携しながらプログラムや企画の検討を行い実施。</p> <p>【主なWS内容】社協メンバーより地区の活動・経緯紹介。「自助」等の問いかけ、グッズ紹介等。班毎に住棟立面図を使って住民(特に高齢者・障がい者等)の確認作業(最初に世帯名未記入の図で、その後世帯名記入の図を使う)。</p> <p>【備考】社協担当者の地区との信頼関係や経験が貢献。又実践者としても成長(写真上)。作業では女性の情報量の多さが目立つ。各班とも回覧板が回る範囲の情報は一定程度あるがそれ以外は未知。情報蓄積の課題が指摘される。</p>
<p>NO. 7 実施団体:精華町社会福祉協議会 実施日:2015.3.14 会場:精華町かしのき苑会議室</p> <p>地区特性:京都府南端に位置する人口3万6千人の町。文化・国際交流や大阪市・京都市などのベッドタウンとしても位置づく。</p> <p>参加者数:50人 所要時間:120分</p> <p>【背景・動機】当該地区の社協担当者から防災講座の依頼。社協が事務局となり実施する。</p> <p>【主なWS内容】全町域を対象とした募集だったため具体的な地区を設定した地図作業ではなく、防災に関するモチベーションを高める内容に。「自助」などの問いかけ、防災グッズ、要援護者の実態等の説明。最後に質疑応答。</p> <p>【備考】中高年男性が多かったが、グッズ作り等も積極的に参加(一般的にこうした作業への男性の積極性は低い)。質疑応答においてLODE実施者(特に南部氏の考え・活動)に対する「感動」を示す反応が非常に多かった。</p>	<p>NO. 8 実施団体:伊丹市昆陽里地区子ども団体 実施日:2015.3.28 会場:伊丹市立昆陽里小学校体育館</p> <p>地区特性:幹線道路に囲まれる住宅地。主に第一種中高層及び第二種中高層住居専用地域。</p> <p>参加者数:約100人(子ども55人、大人45人) 所要時間:120分</p> <p>【背景・動機】筆者らから子供対象のLODEを実施したい旨、当該地区担当の社協関係者に相談し地区の子育て団体を紹介してもらう。当該子育て団体と話し合う中で既存の活動と連動して行うことに興味、共感が見られ実施。</p> <p>【主なWS内容】班に分かれ作業、班毎に子供リーダー設置。地図上で、住環境の確認(避難所、公衆電話、障がい者、外国人、妊婦等、犬、猫の存在)。自宅から学校までの通学所要時間の質問と災害時の対応。グッズ説明。</p> <p>【備考】子供と大人を分けた班構成にしたが混成にしてもよかったかも知れない。大人、高齢者には興味の高かったグッズ(三種の神器)だが子供の関心は小さいようだった(子供の関心を高めるグッズ開発も必要)。</p>

図2 8地区で行われたLODEのワークショップの概要

あるが、とりわけLODEの一連の作業で課題の一つとして注視された。ただし各WSにおいて多くの参加者は、個人情報についてさほど気にしない会話・やりとりが行われており、また極度な情報密閉を危惧する声が多数聞かれた^{注7)}。勿論、プライバシーへの慎重な配慮は必要であり、また重要な個人情報がWS上では顕在していないことも想像される。しかし各WSにおいては個人情報に抵触するような内容(例えば家庭内の事情等)も緩やかに交わされている。地域の生活者間の交流においては法制度を逸脱した個人情報のやりとりがなされており、むしろそうした情報の必要性・重要性が指摘されている。勿論、厳守すべき情報もあるが、一方で民生委員など一部の存在に情報を閉じておくのではなく、むしろ有効な情報を如何に地域住民・関係者間で共有していくかが必要となろう。そのことを防災・福祉というテーマ、またLODEのWSにおいて、参加者が自覚・認識し、今後は有効な情報を蓄積・共有していこうとする方向が多く、の地区で目指され始めている。

ところで各地区のLODE作業で判明したことだが、現代の子どもたちは家庭内情報に極めて疎いという危惧すべき状況にある。一見信じがたいことであるが、親の名前、自宅住所、電話番号を答えられない子どもたちが極めて多い^{注8)}。例えば災害時に避難した際に、こうした内容が答えられない子どもたちが多く存在することは防災面からも危惧することである。個人情報にも関連することであるが今後の調査研究課題としても取り組んでいく予定である。

(6) 個人・個性を尊重する新たな地域社会形成への示唆

本稿ではLODEすなわち社会的弱者の視点として、L(子ども)、O(高齢者)、D(障がい者)を掲げた取り組みを報告したが、この中で、L(子ども)、O(高齢者)に関しては一定のプログラム等の充実化、WS等による効果がある。しかしながらD(障がい者)の分野においては現在、WSの方法、防災・福祉面から見た生活環境整備のあり方を模索している状況にあり今後の課題となる^{注9)}。ここでの難しさは各障がいによる身体的制限からくる面もあるが、同時に障がいの種類・程度が極めてバラバラであり対応が千差万別になるという点も大きい。

ただしここで注目したいのは、障がいの内容が個人々人によってそれぞれに異なるという点である。ここには対応の難しさという課題と共に、個人や個性を拓いていくことを目指す新たな地域社会・公共社会に向けた可能性としての回路が内包されているように思う。難しい分野だが引き続き調査・分析を行っていく。

5. おわりに

本稿では弱者の視点からLODEという手法を掲げ幾つかの実践事例から報告と考察を行った。建築・都市計画分野においてはWSの技術・経験は既に一定の蓄積があるが、活動を通じて特に各関係者と協議する中で感じるのは、防災や福祉の分野においては、より有効なWS経験が浅いように思われる。建築・都市計画分野からのより積極的な投げかけが現在求められていると思う。

一方で、地域のコミュニティ形成やまちづくりの現場において、防災や福祉は極めて現実的なテーマであり、参加者・関係者の意識・行動を促進するものであった。そのことは翻ると、防災・福祉面の向上と共に住民・関係者の主体性を伴って幅広いハード・ソフトの住環境改善に向かうものである。LODEの視点からの活動を引き続き展

開していくと共に、その中での考察を今後さらに深めていきたい。

謝辞

LODE実践とその評価にあたっては各団体、地元関係者、住民のみなさまに大変お世話になった。特に伊丹市社会福祉協議会には多くの協力を頂いた。また本報告の一部は国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)社会技術研究開発センター(RISTEX)の研究助成を受けている。ここに謝意を表したい。

注

注1) 本稿で取り扱う各WS及びその前後の一連の検討・調整に対して筆者は可能な限り全てに参画している。またやむを得ず参加出来ない際は共同実施者から細部の情報を得てきた。各WS後には基本的に毎回アンケートや感想を参加者から得てきた。本稿はこれらの一連の情報をもとにしている。

注2) LODEの提起・計画・実践においては筆者や南部氏と共にまちづくりプランナーの橋宜孝氏の3名が中心となり、任意団体・生きる力を育む研究会などの協力を得ながらこれまで取り組んできている。

注3) 平時の意識・認識の重要性は、南部氏が特に指摘しており、WSにおいても参加者に対して常に厳しい態度でのぞまれている。

注4) こうしたコミュニティの一つとして、障がい者また障がい者を抱える家族も本LODEの視点から重要となる。このコミュニティは、お互いが分かり合えることを精神的・物理的に要求される点が大きく、身近な地区にはその存在が得難く、必然的に付き合う人々は広い市域になっている。このように大きな異なるエリアが重なっているのが現在の地縁コミュニティの実態であることが一連のLODE作業の中で確認されてきた。

注5) 社協関係者に本LODEの実践者として育ててもらうことも当初狙っていたが、むしろ社協関係者からは自らがそうした存在になるのではなく、地域内にそうした実践者を育てること、また地域内でコーディネートしていくことを意識していることが強く指摘された。もっともなことであり、都市計画・まちづくり分野とも共通する姿勢があることを改めて認識した。

注6) 社会福祉協議会の存在意義は全国的にも認められるところだが、しかし運営上の実態から経費削減等の現状の厳しさも大きく、その存在意義・効果が問われる状況にもある。その上で、社会福祉協議会という福祉分野から防災をテーマにした活動への回路は非常に効果的であったようだ。

注7) 各WS全体を通じて数回、参加者からこの個人情報の取り扱いについて質問が出されたことがある。ただしいずれも個人情報を厳しく制限する為の主旨ではなく、あえて質問することで柔軟な情報の取り扱いを求める意図を持ったものだった。また主催者側からもWSにおいて個人情報の取り扱いについては配慮している旨が説明されており、こうした一定の説明があれば多くが問題にならないように感じた。

注8) 例えばある地区のWSにおいて子どもたちに質問したところ、小学校4～6年生27名中、住所を全く書けない(7名/27)、住所を正確に書けない(7名/27)、電話番号を全く知らない(14名/27)、親の名前を漢字で書けない(20名/27)であった。こうした状況は他のWSにおいても見られ、また小学校教諭など関係者にヒヤリングしたが、こうした現状を認めるものであった。体系的な調査はまだ行っていないが、重要な課題であると考え今後、調査・分析していく予定である。

注9) 障がい者(D)の分野については、各施設の観察、専門家へのヒヤリング、当事者と共にその家族へのヒヤリングなどを現在かさねてきている。もちろん障がいの程度にもよるが、重度の障害者の場合、当事者ではなくその家族が重要な要素となろう。こうした方々との検討やWS実践を現在検討している。その中で、障がいを持つ方々は、子ども(L)や高齢者(O)とは異なり、地区に多数存在するわけではないため、自ずと広い市域の中で繋がっており、こうした空間的に広い範囲にわたるコミュニティにおける対応が一つのポイントになるのではないかと考えている。

参考文献

- 1) 大窪武, わがまちを守れ! 防災福祉コミュニティ活動, 月刊消防 28(1), 2006. 1, pp. 18-22
- 2) 倉田和四生, 防災福祉コミュニティ・地域福祉と自主防災の統合, 1999. 9, ミネルヴァ書房
- 3) 山下祐介, 同上の書評, 社会学評論 51(1・164), 2000. 6, pp. 164-166
- 4) 各種紹介・報告があるが例えば静岡県地震防災センターHP等
<http://www.pref.shizuoka.jp/bousai/e-quakes/manabu/index.html>

[2015年10月4日原稿受理 2016年1月12日採用決定]